

論 文 要 旨

ヨハン・ホイジンガの遊戯文化論の特質と社会的・思想的背景

- 近代社会認識と近代文明批評を手掛かりに -

杉 浦 恭

本研究は、ヨハン・ホイジンガ(Johan Huizinga)の遊戯文化論について、その社会的・思想的背景を明らかにした。

ホイジンガの遊戯文化論研究は、これまで数多く行われてきた。しかし、遊戯文化論の社会的・思想的背景を明らかにした研究はなかった。わが国はもちろん、オランダにおいても、こうした研究は行われなかった。遊戯文化論の背景に、近代社会や近代文明に対するホイジンガの批判的認識があったとの見方は存在したが、実証的に行われた研究はなかった。この点で、本研究は、ホイジンガの遊戯文化論研究に新たな貢献ができた。

本研究では、二つの課題を設けた。

第一に、ホイジンガの遊戯文化論には、どのような社会的背景があったのか、オランダ社会の近代化過程と生活様式の変化から明らかにすることである。

そこでまず、オランダ社会の近代化過程を、産業化、人口変動と都市化、ナショナリズム化、大衆化、教育の近代化の五つの柱を立て、それぞれについて明らかにした。これは近代化の大枠を把握するためであるが、同時に、ホイジンガの遊戯文化論の社会的背景を探る意図があった。

オランダの産業化は、ホイジンガの生涯を通して進んだ。ホイジンガが生まれた産業革命期以降、オランダ社会は急速な産業化を遂げた。なかでも工業化の進展は、オランダの経済力を強め、人々の生活を物質的に豊かにした。だが一方で、それまでの家庭的な手工業や、ゆとりのある生活は失われていった。オランダの人口は、ホイジンガの生きた時代に急増し、都市部では、人口の集中化が進んだ。より収入の多い仕事を求め、田舎から移り住んだ労働者によって、大都市は人間で溢れた。そうしたなか、労働者の間に選挙権を求める運動が起き、段階的に選挙権が拡大された。1917年に普通選挙制と比例代表制が導入されると、政治は、上層階級から労働者階級の手に渡った。知識や判断力に乏しい大衆が、数の多さで政治を動かすようになったのである。オランダの帝国主義政策は、インドネシアにおいて文化的な統制を行った。軍備の拡大は、戦争のための備えであった。他国の文化を力で統制し、近代文明を戦争に利用した。普通教育の普及は、就学率を上げ、文盲率を低下させた一方で、子どもに大量の知識を注入し、創造力や判断力を養う教育が疎かにされた。学校教育は、遊びの要素を失い、学ぶことに対して受け身の姿勢をつくった。オランダ社会の近代化は、人々を、遊びと文化から疎遠にした。

次に、よりミクロな視点から、遊戯文化論の社会的背景に迫った。労働者層の生活に焦点を当て、近代建築と住環境、労働環境、自由時間と余暇活動、性行動を明らかにした。

ホイジンガの時代、オランダ都市部の住環境は劣悪だった。そのため、いち早い改善を目的に、標準化・画一化した住宅が数多く建てられた。それは、かつての建築と異質な、コンクリートでできた装飾を施さない一様なスタイルであった。

経済的合理性を重視したオランダの近代建築は、建築において遊びの要素を消失させた。建築文化は、画一化し、多様性を失ったのである。労働者の労働環境は、産業革命以降、かなり厳しい状況にあった。労働時間は徐々に減少したものの、1920年代の終わりまで長時間労働が行われていた。労働者は、少しでも収入を増やすため、過酷な労働に耐えていたのである。仕事からゆとりや遊びの要素は失われ、非人間的な労働形態で働いていた。その極みが、1920年代に導入されたテイラーシステムであった。経済的利益を上げるため、効率性を徹底的に追及したシステムは、人間を機械化し、労働から精神を奪った。経済的・物質的豊かさに取り付かれた社会の姿であった。そのため、自由時間は、休息や気晴らしに利用され、アルコールに溺れる労働者も多かった。教養を身につけたり、自己実現・自己開発を図る文化的な活動を行う労働者は少なかった。しかし、20世紀になり、少しずつ自由時間が増えると、労働者のなかにはスポーツや趣味を楽しむ者が増えた。積極的・能動的な余暇活動を行う労働者がいた一方で、映画やギャンブルなどの受動的・消極的な余暇活動を行う者も多かった。遊びや娯楽は、近代文明の成果を取り入れて大衆化が進んだ。労働者の性行動については明言できないが、宗教離れが進む中で、性倫理や規律が緩んだため、かなり解放的であったと考えられる。特に、都市部における工場労働者の間で、同棲が多く見られたことや、職場で卑わいな冗談がしばしば交わされていたこと、非嫡出子の割合が高かったことなどから推察される。見方によれば、精神的な自己規律が弱まり、肉体的な欲求を満たす傾向があったとも考えられる。

ホイジンガは、遊びが損なわれ、文化の画一化が起きた社会に生きていた。こうした状況が、ホイジンガに遊びと文化への関心を高めさせた。遊戯文化論の社会的背景には、遊びと文化の重要性を考えさせるオランダ社会の近代化があった。

本研究の第二の課題として挙げたのは、ホイジンガの遊戯文化論には、いかなる思想的背景があったのか、ホイジンガの近代社会認識と近代文明批評から明らかにすることである。

この課題に答えるため、政治・経済、文化・教育、社会生活一般に渡る、近代社会と近代文明に対するホイジンガの見解を明らかにした。ホイジンガの見解は、次の通りであった。

政治は、遊びの要素が薄れ、面白味のない生真面目な活動になった。大衆が議会政治に参加したことで、それまでみられた品位あるスポーツ感覚の討論がなくなった。政党は己の利益を獲得するため、議会においてムキになる生真面目な打算的議論に終始するようになった。

経済は、利益追求を目的に効率性を重視したため、労働をはじめ、生活の様々な場から遊びやゆとりが失われた。すると人間は、与えられた労働、与えられた娯楽のなかで生活し、自ら考え判断する力、創造する意欲を喪失した。

文化は、画一化や低迷化が起きた。それは、経済性を重視した近代建築、商業

宣伝に利用された芸術、キリスト教の倫理や道德の及ばない文学、政治に利用された哲学などに見ることができる。文化の創造過程における努力や修練、遊びは失われ、精神的な要因が軽んじられるようになった。

普通教育は、中途半端な知識を身につけた、受け身で均質化した人間を輩出した。その原因は、思考力や創造力の育成よりも、知識の量を増やすことに重点をおいた学校教育にある。教育は、有用性を重視するあまり真面目になり、遊びの要素が減退した。

社会生活は、近代文明がもたらした映画やラジオが安易な娯楽として人気を得たが、他方で、人間から思考力や判断力を奪い、受け身の人間を増やした。販売部数を増やすためセンセーショナルな記事を書く新聞は、利益を追求する近代社会の真の姿であった。また、人々の宗教離れや性交渉の自由化が進み、道德や規範の衰敗が起きた。

ホイジンガは、近代社会が、物の豊かさや利便性を追求したため、近代文明に依存する度合いが大きくなり、人間の社会生活が機械化したと捉えた。これが、人々から遊びを奪い、物事に積極的に取り組む態度を失わせ、文化的な活動に対する意欲を失わせたと考えたのである。

こうしたホイジンガの近代社会認識と近代文明批評は、二つに集約できる。

(1)19世紀以降、経済的価値・物質的価値の追求が社会を支配して以来、文化的価値・精神的価値の重要性が軽視されたこと。

(2)大衆社会の到来によって、受け身の態度をもった人間が増えたことによる思考の均質化と文化の画一化及び低迷下が進んだこと。

これらに共通するのは、遊びを失い、文化の危機を招いた、近代社会と近代文明に対する批判であった。遊戯文化論の思想的背景には、このようなホイジンガの認識があった。

ホイジンガの遊戯文化論の特質は、美しく生きたい夢や崇高な理想が、遊びを通して表現されたとき、豊かな文化が創られることにあった。またホイジンガは、遊びと文化の密接な関係を、様々な文化領域で論証した。ホイジンガにとって、遊びは、夢や理想を表現する方法であり、文化の形成に欠かせなかった。その遊びが、近代社会において、経済的・物質的豊かさを求めるあまり、蔑ろにされているとホイジンガは認識した。文化を愛するホイジンガにとって、状況はかなり深刻であった。近代文明に重みをおく社会に向けて、遊びと文化の重要性を説かずにはいられなかったのである。これが遊戯文化論となって、世に出たといえる。

以上から、本研究では次の結論を得た。

ホイジンガの遊戯文化論は、オランダ社会の近代化において、遊びを喪失し、文化を危機に陥れた、経済的価値・物質的価値を追求する近代社会・近代文明に対する批判的認識が背景にあった。